

2016年7月24日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 21 章 15～22 節

説教：イスラエルのともしびである方

## 1 ダビデ

### 1) 老い

イスラエルは一つの国としてまとまり始め、大きな力を持つようになって来ましたが、それでもなお敵であるペリシテ人達を完全に押さえ込むまでには至っていません。しばしば争いが起きます。ダビデはそのたびごとに部下を連れて戦場に向かいます。ダビデがまだ若かった頃、戦いがあれば率先して前線に向かい、どんな敵にも負け知らず。その活躍ぶりは上司であったサウルも嫉妬を覚えるほどでした。

そんなダビデもいまは老人です。おそらくこのときはすでに六十代の後半になっています。15 節に「ダビデは自分の部下を連れて下り、ペリシテ人と戦ったが、ダビデは疲れていた」とあります。年をとって思うように体が動かなくなってきました。

### 2) 戦いに出る

なぜそこまでしてダビデは戦いに出るのでしょうか。現場のことは部下に任せて、王さまは安全なところに置かれた司令部に陣取っていただければいいはず。部下が頼りなかったということでしょうか。そうではないでしょうか。今日の箇所には優秀な部下たちのことが名前を挙げて記されています。あるいは、上司として本来なら部下に任せるべきところを、部下に任せることのできない、全部自分が握っておかないと気が済まない、そのようなタイプのリーダーだったのでしょうか。もちろんそうではない。ではなぜダビデ

は高齢になっても戦いに出ようとしたのでしょうか。

理由は二つあります。一つ目。そもそもイスラエルの王は、人々から何を期待されていたのか。そのことに関係します。もともとイスラエルには王さまというものがなかったのですが、次第に敵から襲われて生活やいのちが脅かされるようになると、人々は自分たちの先頭に立って戦ってくれる王さまが欲しいと訴え、いろいろあった末にイスラエルに王が立てられるようになった。その最初の王さまがサウル、二代目がダビデということです。ですから、戦いの最前線に出ることは、最初からイスラエル王の義務として課せられていたわけです。年をとったので休みますと簡単に言わなかったという事情があります。それが一つ目の理由。

### 3) ダビデの罪がうずく

二つ目の理由。そんなダビデが一度だけ戦場に出なかったことがあります。戦いは部下に任せ、自分は宮殿で昼寝をしていました。昼寝から目覚めて屋上に上って夕涼みをしていたら、向こうに裸になった若い女性、バテ・シェバがからだを洗っているのを見まう。このことをきっかけにして、ダビデは姦淫の罪を犯し、バテ・シェバの夫であるウリヤを戦場で死ぬように仕向け、何事もなかったかのように罪を隠そうとします。結局、神は預言者ナタンをダビデのところに送り、悔い改めを迫り、ダビデは自分の罪を告白するのですが、問題はそれで終わらない。ダビ

デの罪はのちのち彼の子どもたちにも深刻な影響を与えてきます。長男のアムノンは妹のタマルを辱め、それを知ったアブシャロムはアムノンを暗殺し、父ダビデを殺そうとさえ企てる。その結果、アブシャロムは戦場で槍に刺されて死んでいきます。全部ダビデの罪から始まったことです。

ダビデはずっとそのことで苦しんで来ました。そのことがあるから、どんなに年を重ねても、どんなに疲れていても、戦場に向かわなければと考えます。戦場に出るのは自分の罪を自覚していたことの現れだったのです。

## 2 ダビデの部下たち

### 1) 「戦いに出ないでください」

いっぼうで困ったのは家来たちです。彼らも戦いに出発する時、ダビデ王は大丈夫だろうかと心配しました。実際に戦場に来てみれば、ダビデのからだの衰えは誰の目にも明らかです。足もとがふらつき、剣を操ることも難しい。

そんな隙だらけのダビデを、敵であるイシュビ・ベノブは見逃しません。ダビデを狙い撃ちにして殺そうと襲いかかってきます。幸いにしてダビデの部下アビシャイがすぐそばにいて、これに応戦しイシュビ・ベノブを倒します。なんとか大事には至らずに済みました。

もうこうなると家来たちも真剣にダビデを説得し始めます。17節。「あなたは、もうこれから、われわれといっしょに、戦いに出ないでください。あなたがイスラエルのともしびを消さないために。」

### 2) 退くことの難しさ

家来たちの言いたいことは単純です。「王さま、あなたはもう高齢になって戦場で戦うような体ではありません。もしここであなたに倒れてもらっては困ります。ですから宮殿で休んでいてください。」はっきりと言えば、王さまに対して引退勧告をしたようなものです。でもストレートに引退してくれと言うことはできないので、それで穏やかな表現に言い換えた。それで、「あなたはともしびとを消さないようにしてください」と言い添えた。そんな風にも聞こえます。

よく引き際が肝心だと言われます。それでも、ときどき大きな組織のリーダーが高齢になったけれどもなかなか辞めないで困っているという話を聞きます。教会でも高齢になった牧師が辞めないで困るということもあるのだそうです。そういうことを聞いていましたので、この教会では、特段の事情がない限り牧師は六十五歳になったら辞めてもらうという規則にしております。なぜこれほどまでに適切な時に辞めることが難しいのでしょうか。

私たちは産まれた時から前に進むことを考えてきました。人生は山を登るようなもので、幸せになるために一歩でも高いところを目指してがんばってきました。ですから、山を降りることなど考えたこともありません。山の上がり方は教えてくれたけれど、山を降りる方法については誰も教えてくれない。しかし、現実にはいつか山を降りなければならぬときがやってきます。退くべきときがやはりあるのです。

ダビデも若い時から一生懸命働いてきた人です。上司のパワハラに苦しみ、部下に裏切られ、子どもにもいのちをねらわれました。緊張の連続です。あるとき、少しだけ休んで

もいいかと気を抜いたら、大きな罪を犯してしまいました。そんな過去があります。あの苦い経験から、部下が戦っている時に自分だけ宮殿で休むことなどありえない。そのことを肝に銘じるようにして、自分を奮い立たせてきました。ダビデは常に前に進むことだけしか考えていなかった。

そんなダビデもいつまでも若い訳ではない。体が思うように動かなくなってきました。家来に言われて初めて、戦いという現場から退かなければならないことを悟ります。あなたにはもう用がありません。何かそんなふうに宣告されたように感じてがっかりとしたでしょう。しかし、やがてダビデは家来たちが語ったことばから、大切なことに気がついていきます。

### 3 ともしび

1) 「イスラエルのともしびを消さないために」

もう一度17節の家来のことばを読みます。「あなたは、もうこれから、われわれとつしよに、戦いに出ないでください。あなたがイスラエルのともしびを消さないために。」

最初は、年寄りはおとなしくしててくださいと言っているようにしか聞こえなかった。でも家来たちが言っていることはそうではない。戦いのことはもう若い者に任せて大丈夫。その代わり王さまには、イスラエルのともしびを消さないという大切な役割を果たしてもらいたい。そのように言っていることにダビデは気がつきます。

2) 「主よ。あなたは私のともしび。」(22章29節)

イスラエルのともしびが消されるような

ことはあつてはならない。言い換えれば、イスラエルはやみのなかにあるということです。だから、ともしびによってやみを照らしてもらわなければならない。そんな存在だと言っています。でも、いったいその「ともしび」とはなんでしょう。ダビデ自身がこう言っていることに目を留めます。22章29節。「主よ。あなたは私のともしび。主は、私のやみを照らされます。」

ダビデは「私のやみ」と言って、自分の中のやみの存在を意識しています。やみをそのままにしておくことができないとも感じています。やみを照らす光がなければならぬ。その光となる方こそ、私の主なのだと言っています。

#### 3) ともしびを消さないために退く

ともしびとはなにか。私たちの主こそがイスラエルのともしびであり、私たちのやみを照らすともしびです。

そこまではわかった。でも家来はこう言っていました。「あなたがイスラエルのともしびを消さないために。」ともしびを消さない、と言われても、いったいどうすればよいのでしょうか。これはなにもダビデだけのことではない。私たちだっておなじです。

ともしびを消さないということで、すぐに思いつくことは、積極的に主を証しすること、機会を見つけてもっと伝道すること、もっと主のために働くこと。こんなことが頭に浮かびます。間違っていない。正しいことでしょう。

でもきょう聖書はなんと語っているのか。戦いから退き、あなたがたのともしびを消してはならない。主を証しできる機会が与えられることは幸いなことです。救い主のことを

伝えられるということは、喜びです。でもいつまでもできる訳ではありません。体が動かなくなるときがきます。やりたくてもできない。やろうと思っても気力が湧かない。主の兵士になれない。もう自分は役に立たない。そんなふうには落ちる時が来るかもしれません。でも主はなんと行ってくださるか。あなたはいつまでも最前線に出る必要がない。退いてよい。でもそれであなたの役割が終わったのではない。退くことによって、あなたは大切な働きをすることができる。ともしびを消さないという役割を果たすことができる。でもどうやって？

#### 4) やみを照らすともしび

ダビデはこう歌いました。「主よ。あなたは私のともしび。主は、私のやみを照らされます。」ともしびはどこで輝くのですか。光のあるところですか。いいえ。やみの中で輝くのです。最前線でがんばって働いている時、自分の何あるやみになかなか気がつきません。ところが、退いて静まる時、心のやみが浮かび上がります。こんなやみが自分の中にあつたのだと恐れおののきます。そのやみの中にともしびを照らすのです。自分の中のやみを照らさないで、いったいどこを照らすというのでしょうか。ほかの人のやみは照らすけれど、自分のやみはそのまま、ではないでしょう。ダビデは自分のやみを照らし続けます。そうすることが、イスラエルのやみに輝くともしびを守り続けることになる。それがイスラエル王としての大切な役割であることを自覚していきました。私たちもおなじです。主はどこにおられるかと思っていましたか。私たちの暗やみの中にすわっておられます。だからともしびを照らしていただき、私たち

は主といっしょにやみの中にあるものに目をこらしていきます。そのことが世のともしびを守り続ける大切な働きとなります。

やみに輝いてくださる主をほめたたえます。